

英語学習における日本語の知識の活用について*

栞原 和生

要 旨

日本語と英語では命題内容の構造化について異なる傾向が見られる。日本語では複数の文をつなぎ合わせて複雑な命題内容を表現する場合、テ形・連用形接続を用いた重文に構造化する傾向があるのに対して、英語では複文構造に具現する傾向がある。また、日本語では自動詞構文が用いられるところ、英語では他動詞構文が用いられることが多く、命題内容の構造具現にズレが生じる。このような日本語とは異なる英語の属性の習得には、学習者の母語である日本語の知識を意識化させ、英語と明示的に対比しながら学習することが有効であることを論ずる。

1. はじめに

平成 25 年に全面実施された高等学校学習指導要領（外国語・英語）の教育課程では、統合的な言語活動を充実させ、コミュニケーション能力の育成を目標に掲げ、「コミュニケーションを支える基礎」となる文法のすべては、言語活動と効果的に関連付けて学習することが求められている。文法知識の習得において工夫された言語活動が有効に働くことはあろうが、習得すべき文法知識のすべてが言語活動に従事することによって、学習者の無意識の知識として内在化されるかという、疑問の余地がある。日本のように英語を外国語として学習する

* この小論は神田外語大学英語教育公開シンポジウム「日本の英語教育—小学校から大学まで—（第 2 部「グローバル時代に求められる英語使用者—高大連携から考える—）」（2015 年 9 月 13 日（神田外語大学））で「メタ言語能力を育む英語教育の可能性を考える」と題して講演した内容を基に加筆・修正したものである。発表の機会を与えてくださった長谷川信子氏にお礼申し上げる。シンポジウムでは、永井典子氏、長谷川信子氏、田中真紀子氏から貴重な助言を頂戴した。ここに記して感謝の意を表したい。

EFL の環境、習得すべき外国語が学習者の母語とはかなり異なる属性を備えていることなどからすると、言語活動に従事するだけで養うことのできる文法知識は、使用場面に限定的で体系的基盤としてはかなり脆弱にならざるを得ないと考えられる。この小論では、言語活動を工夫することとは別に、学習者の母語の知識を活用し、それを意識的に英語と対比させて学習していくことの有用性について論ずる。

第2節では、言語の創造的使用の基盤となる「埋め込み」について述べ、この仕組が英語運用能力の育成にどのような点に関連するのかについて論ずる。第3節では伝達すべき内容が複雑化・緻密化するほどに、個々のコミュニケーションの場面やタスクを超えたメタ言語能力の育成が必要であることを述べる。日本語と英語では、複数の文をつなぎ合わせる際に「構造化」について大きな相違点があることを見る。第4節では、日英語における自動詞構文、他動詞構文の選択の違いについて検討する。第5節では、第3, 4節で取り上げる対応する構造のズレが、大学生の英作文にどのように影響しているのかを示す予備的調査結果について述べる。

2. 「埋め込み」という仕組

以下では言語の基本的特性の1つでありながら、コミュニケーション能力の育成に特化した英語教育ではあまり認識されることのない「埋め込み」という仕組について述べることにする。

言語には意思の疎通を行うという側面に加え、抽象的で複雑な思考を可能にする基盤という側面がある。複雑な思考の基盤として「言語の創造的使用」という特性、すなわちどの言語の話し手も無限に新しい言語表現を作り出し、それを理解することができるという特性を挙げることができる。この「言語の創造的使用」を可能にしているのが、高度に組織化された規則性を持つ「言語の仕組」、すなわち「文法」である。その規則性の1つに、ある構造的単位をそれと同じ種類の

構造的単位の中に繰り返し埋め込むことによって、複雑な構造的単位を無数に作り出すことができるというものがある。

(1)は、S（文）に従属接続詞の *that* を付け別の S を埋め込み、それを繰り返すことによって無限に長い文を作ることができることを示している。

- (1) a. [s John left].
- b. [s Bill knows [s that John left]].
- c. [s Sue thinks [s that Bill knows [s that John left]]].

この「埋め込み」という操作は、どの言語にも共通して見られる特徴であり、(2)の日本語の例では、関係節が別の関係節の中に繰り返し埋め込まれている。

- (2) a. [NP [S 走って逃げる] 泥棒]
- b. [NP [S [NP [S 走って逃げる]泥棒]を見つけた]大学生]
- c. [NP [S [NP [S [NP [S 走って逃げる] 泥棒]を見つけた]大学生]を呼び止めた]人]

このような仕組みが備わっているからこそ、人間は時空間を超えて、実際にはありえない事柄や複雑な意味関係を持つ命題をいくらかでも作ることができるのである。こうした特徴を備えた言語は、言葉を用いたコミュニケーションという観点からすると過度に複雑な体系になっていると思われるかもしれない。(1), (2)のような例は、理論的には可能であるものの、実際に用いられることはあまりないであろうが、次の実例が示すように、伝達内容が複雑化するほどに、(1), (2)で示した「埋め込み」操作によって、「複文構造」を用いなければ表現することはできない。

- (3) Rather spiders spin spider webs because they have spider brains, which give them the urge to spin and the competence to succeed. (Pinker 1994: 5)

(3)では S の付加部の位置に副詞節 (because 節) が埋め込まれているが、さらにその副詞節内に不定詞節の埋め込まれた関係節が埋め込まれている。

現行の高等学校学習指導要領では、文法について個々の文法項目に特化した指導をするのではなく、言語活動と関連付けて行うことが求められており、上で述べた複文を作る仕組の学習についての直接の言及はないが、いくらか関連すると思われる記載に次のようなものがある¹。

- (4) 説明的な文章においては、事実を述べた部分と意見を述べた部分とが組み合わされて構成されている。このような説明的な文章の特徴を踏まえれば、「事実と意見などを区別する」ことは、内容を的確に理解したり適正に伝えたりするために必要なことである。その際、事実と意見をうまく整理できるように、例えば、事実や意見などを導く以下のような表現について指導する必要がある。生徒に対しては、これらの表現を知識として理解させるだけでなく、「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」の活動を通じて繰り返し活用させることが大切である。

[1] 事実を伝える表現

例 1 It's stated /known/said (that)...

例 2 Data show (that)...

¹ (4)は『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』（文部科学省、平成 22 年 5 月）p.17.による。

例 3 Evidence shows (that)...

[2] 意見を伝える表現

例 1 I think/guess/believe/surmise/gather (that)...

例 2 In my opinion...

[2]の例 2 以外は動詞の目的語として S の埋め込まれた複文構造を持つ例である。このように異なる動詞の目的語の位置に S を埋め込むことによって、埋め込まれた命題に対する話し手の様々な姿勢を表すことができる。したがって、言語活動を通して、[1], [2]のような表現に習熟することは有益であろう。しかしながら、こうした表現に習熟することは、情報の種類を判別するには役立つであろうが、複雑で緻密な伝達内容をどのように構造化するのか、その方法を意識的に学習しなければ、複雑な命題内容を表現する力を養うことには繋がっていかないであろう。とりわけ、次節で詳述するように、複雑な命題をどのように構造化するかに関して、日本語と英語は大きく異なるという事情を考慮すると、「複文構造」を作る仕組みについては、日本語と英語を明示的に対比させて、意識的に学習することが有効と考えられる。

3. 複文構造

この節では複数の文をつなぎ合わせて、複雑な伝達内容を表現する際、英語では複文に構造化されるのに対して、日本語では(5)のように動詞のテ形・連用形を用いて単文を並置した重文が多用されることを述べる。

(5) 朝 6 時に起きて、新聞を読んで、コーヒーを飲んだ。

(5)は VP の等位接続された(6a)や重文の構造を持つ(6b)に対応している。

- (6) a. I got up at six in the morning, read a newspaper and drank a cup of coffee.
b. I got up at six in the morning, I read a newspaper and I drank a cup of coffee.

英語で(6)のような構造を持つ文を多用すると、稚拙な表現という印象を与えかねない。これに対して、日本語では連用形接続で文を並置した重文を多用したとしても、(6)から受けるような印象を与えることはない。次の文章を見られたい²。

- (7) この夏は東北の祭りを見る機会があった。青森のねぶた祭りと秋田の竿燈祭りだ。起源は古く、どちらも無病息災を願う地元の素朴な行事だったようだ。今では祭りの期間中に延べ数百万人が集まり、経済効果も数百億円に上る一大イベントになっている。

青森県も秋田県も人口減少が続き、青森市は4年前に人口が30万人を切った。秋田市も10年前をピークに年々減り続け、30万人を割るのは時間の問題だ。人口減の中で祭りの規模を維持するには、工夫が必要な時期に来ている。

ねぶた祭りは2年続けて赤字になり、今年是有料観覧席の価格を値上げした。果たして収入は好転したのか。

東京都心では祭りの神輿の担ぎ手が少なくなり、地区行事への参加を条件として、学生に格安の住居を提供する地域もある。

この文章は人口減少が各地の祭りに与える影響と今後考えるべき対策について論じているが、内容とは別にこの文章を構成する文の構造を見ると、連用形接続を用いた(単)文の並置が多用されていることが分かる。まず、冒頭から3つ目の文では、「起源は古く、どちらも無病息災を願う地元の素朴な行事だったよう

² (7)は朝日新聞 金融情報面の「経済気象台」(2017年8月26日)に掲載された「祭りと人口現象」という論説文の一部である。

だ。」のように連用形接続を用いて 2 つの文が連結されている。その後も連用形接続で文の並置された文が続き、第 2 段落の 1 目と 2 目の文、第 3, 4 段落の文も連用形接続を用いて文が並置された構造になっている³。こうした特徴はこの論説文の著者に特有なものではなく、日本語の文章表現によく見られる特徴である。複雑な命題内容の構造化についてこのような特徴を持つ日本語を母語とする学習者にとっては、日本語と英語を明示的に対比させることによって、複文構造を用いて表現する方法を意識的に学習することが有効であろう。

以下では、文末に現れる英語の関係節、不定詞節、副詞節を取り上げ、福地 (2012) が指摘するように、それぞれ日本語文では連用形接続を用いた重文に対応することを見る。

まず、関係節が文末に現れた次の例文を見られたい⁴。

(8) No mute tribe has ever been discovered, and there is no record that a region has served as a “cradle” of language from which it spread to previously languageless groups. (Pinker 1994: 13)

(9) Samuel Johnson was a major British literary figure who achieved towering stature as a critic and as a bold, trenchant and witty essayist. (Thomas 2011:71)

³ (7)に複文が全くないわけではない。複文構造を持つ文としては次のような例があるが、いずれも連体修飾節の構造を持つ文である。

- (i) a. [東北の祭りを見る]機会があった。
- b. [どちらも無病息災を願う]地元の素朴な行事だったようだ。
- c. [経済効果も数百億円に上る]一大イベントになっている。

(i)の例文は、いずれも関係節を用いた英文には訳すことができない。日本語の連体修飾節には、英語の関係節に対応するものもあるが、連体修飾節はそれが修飾する名詞句について述べた内容を表していれば、[NP [s...] NP]の構造が認可される (Kuno (1973)) という特徴があり、英語とは異なりかなり自由に用いることができる。したがって、この点からも(7)の文章は、日本語の特徴を反映した文構造を持つ文によって構成されているといえることができる。

⁴ 斜体字は筆者による。この小論で用いる Pinker (1994), Thomas (2011)の邦訳は、『言語を生み出す本能 (上)』(椋田直子訳)、『ことばの思想家 50 人—重要人物からみる言語学史』(中島平三総監訳)による。

- (10) The brain must contain *a recipe or program that can build an unlimited set of sentences out of a finite list of words.* (Pinker 1994: 13)

(8), (9)は邦訳では、それぞれ次のようになっており、いずれの場合も連体修飾節を用いなくて、連用形接続を用いて2つの文を並置した構造になっている。

- (11) 言語を持たない部族が発見された例は一つもない。また、ある地域が言語の「ゆりかご」になり、従来言語を持たなかった集団に言語が波及していった、などという記録もない。

- (12) サミュエル・ジョンソンは英国文壇の大御所であり、批評家として、また大胆かつ鋭敏で機知に富む随筆家として偉大な地位を築いた。

(10)でも関係節が文末に現れるが、邦訳では単文が並置されている。

- (13) 脳中に処方箋なりプログラムなりがあるに違いない。そのため有限個の単語から無限の文を作り出すことができるのである。

(10)の関係節の構造に即して連体修飾節を用いて(14)のように訳すこともできるが、(13)と(14)を比べてどちらが自然な表現かは言うを俟たない。

- (14) 有限個の単語から無限の文を作り出すことができる処方箋なりプログラムなりが脳中にあるに違いない。

(15), (16)は文末に不定詞節の現れる例である。

(15) Early on, Chomsky's work encouraged other scientists, among them Eric Lenneberg, George Miller, Roger Brown, Morris Halle, and Alvin Liberman, *to open up whole new areas of language study, from child development and speech perception to neurology and genetics.* (Pinker 1994: 10)

(16) He hired a corps of helpers *to copy the relevant passages and organize the headwords alphabetically.* (Thomas 2011: 74)

(15), (16)では共通して文末に長い不定詞節が配置されている。特に(16)では VP が等位接続されており、複雑な不定詞節となっている。いずれの場合も対応する自然な日本語訳では次のように連用形接続による文の並置という構造に具現している。

(17) チョムスキーの姿勢は早くからエリック・レネバーグ、ジョージ・ミラー、ロジャー・ブラウン、モリス・ハレ、アルヴィン・リバマンなど、他の多くの学者を刺激し、児童の発達や言語認知から神経学、遺伝学にいたるまで、言語研究に数々の新分野を拓いた。

(18) 彼は助手の一団を雇い、関連する章句を書き写させ、見出し語をアルファベット順に配置させた。

(17), (18)の日本語訳は、対応する英文の不定詞節と同様、情報構造上の制約にも叶った配列になっている。情報は話し手・聞き手の双方が了解している旧情報から聞き手にとっては未知の新情報の順序で配列される傾向にある。例えば、(16)では、不定詞節が新情報を表しており、そのため文末に配置されている。(16)の例は、(19)のような日本語文に訳すこともできるが、(18)の方がはるかに自然な

日本語文であろう。これは(18)が情報構造上の要請を満足する語順になっているからである。

- (19) 関連する章句を書き写し、見出し語をアルファベット順にならべるのに、彼は助手の一団を雇った。

最後に副詞節の例として、文末に現れる分詞節と *because* 節を検討する。

- (20) *The babies must have been keeping track of how many dolls were behind the screen, updating their counts as dolls were added or subtracted.*

(Pinker 1994: 59)

- (21) *But Johnsonian style was also immensely admired, lending authority and erudition to his critical opinions on Shakespeare (reprinted 1968) and his biographies of English poets (1779-81).*

(Thomas 2011: 75)

(20)では、文末の分詞節に加え、疑問節の埋め込まれた複文構造になっている。(20), (21)も邦訳では、次のようにテ形・連用形接続を用いた重文として具現している。

- (22) 赤ん坊たちはスクリーンのむこうにいくつ人形があるかを覚えていて、人形が足されたりするたびに数を新しくしているに違いない。

- (23) しかし、ジョンソンの文体は非常に高く評価され、彼のシェイクスピアに対する批判的な見解（1968年に復刻）と英国詩人の伝記（1979-81）は、知的権威とされた。

(24), (25)では付加部の位置に *because* 節が埋め込まれている。

(24) *By nightfall his amazement turned to alarm, because there were points of light in the distance, obvious signs that the valley was populated.* (Pinker 1994: 12)

(25) *The details of syntax have figured prominently in the history of psychology, because they are a case where complexity in the mind is not caused by learning; learning is caused by complexity in the mind.* (Pinker 1994: 118)

(24)の例は *because* 節の後に同格節の続く複雑な複文構造になっている。(25)でも *because* 節内に関係節が埋め込まれている。(24), (25)は邦訳ではそれぞれ(26), (27)のようになっている。

(26) 日が暮れると驚きは不安に変わった。遠くに灯火が点々と見えたのだった。人が住んでいる何よりの証拠である。

(27) 統語論の詳細は、登場以来、心理学の歴史に大きな役割を果たしてきた。心的な複雑さが学習によって、生じるのではなく、学習が心的な複雑さによって生じる事例だからである。

複文構造を持つ(24), (25)は、(26), (27)では、共通して2つの単文が並置された構造になっているが、元の英文の情報構造が見事に再現されていることに注目したい。

because 節は *why* 疑問文の答えになり得ること、分裂文の焦点位置に生起し得ることから、新情報を表すことが分かる。

(28) A: Why did John leave?

B: Because he had a headache.

(29) It was because Harry came that John left.

したがって、(24), (25)の文末に現れる **because** 節は新情報を担っているのである。(24)の **because** 節は(26)では「のだ」文を用いた文に訳されている。(27)ではコピュラ(～である／～だ)の前に理由を表すカラ節が配置されている。日本語の「のだ」文や「コピュラ文」には「の」及びコピュラの前に現れる要素を焦点化する機能がある。したがって、(26), (27)の日本語訳は、複文構造ではなく(単文を並置するという日本語らしい構造具現を持ちながらも、元の英文の意味するところを余すところなく表現している)のである⁵。

理由を表す副詞節には **because** 節以外に **since** 節があるが、**since** 節は旧情報を担うので、**why** 疑問文の答えとして用いることも、また、分裂文の焦点位置に生起することもできない。

(30) A: Why did John leave?

B: *Since he had a headache.

(31) *It was since Harry came that John left.

⁵ (26)の「のだ」文(「遠くに灯火が点々と見えたのだった。」)は、形式上は形式名詞の「の」を下線部の文に付加した従属節の構造を持つように見えるが、意味的には下線部の命題と助動詞的表現である「のだ」から成る単文と考える方が母語話者の直感に近いと言える。このように、日本語には表面上は複文構造を持つように見えても、意味的には単文化している場合が多く見られる。益岡(2007)では「のだ」は説明のモダリティ形式とされている。

理由を表す接続詞の **because** と **since** は、2つの命題を主従の関係を持つ複文に構造化するという点では同じ特徴を持つが、**because** がどちらか一方の命題を焦点化するのに対して、**since** は一方の命題を脱焦点化（旧情報として提示）するという異なる機能を持つのである。様々な複文表現を学習する過程の入り口では、第2節の(4) [1], [2]で見たように当該の表現が用いられる場面やタスクに即して、例えば、「理由や原因について述べる場合」といった導入の仕方でも有効であろうが、複雑で高度な内容を表現することが求められる学習段階では、**because** 節と **since** 節が命題の焦点化に関して異なる機能を持つことを理解しなければ、この2つの節を使い分ける力を養うことには繋がっていかないだろう。

上で述べたように伝達内容が複雑で長くなればなるほど、英語では複文構造に具現化され、文末に配置される傾向にある。一方、日本語では、複雑な意味内容であったとしても、連用形接続を用いて文を並列する重文の構造に具現する傾向にある。このような複雑な命題の構造化に関する日本語と英語の違いは、言語活動に取り組むだけで自然に身につくことはないであろう。日本語と英語の違いを明確に意識した学習が有効であると考えられる⁶。

4. 自動詞・他動詞構文

命題の構造化に関する日英語の相違点として、次のような特徴のものがある。

- (32) 日本語では命題が自動詞構文に構造化される傾向にあるのに対して、英語では他動詞構文に構造化される傾向にある。

日本語では事態が変化した結果どうなっているのかという「ナル表現」が多く

⁶ この節で述べた日英語の違いを意識しながら英文和訳や和文英訳を行うのは有効な学習方法であろう。この点については、福地（2012）を参照されたい。この小論では取り上げなかった文法項目に関する議論については、栗原（2015a）を参照されたい。

用いられるのに対して、英語では行為・動作の主体や原因がどうするという「スル表現」が多く用いられ、それぞれのタイプの言語は「ナル言語」「スル言語」と呼ばれることがある（池上（1981））。日本語でも他動詞構文を用いることはできるが、英語ほど自由に用いられる訳ではない。例えば、鍵が見当たらず探していたところ、妻が見つけてくれたとしよう。英語であれば、問題なく(33)のような他動詞構文を用いて表現することができるが、日本語では(34)の他動詞構文を用いるのは不自然であろう。

(33) My wife found it.

(34) 妻が鍵を見つけた。

(34)の他動詞構文はそれ自体文法的な文であるが、「鍵を見つけたのは他ならぬ妻だ」というような解釈を持ち、(33)とは異なる特徴を持っている。ここで問題になっている状況であれば、(34)ではなく(35)のような自動詞構文で表現するであろう。

(35) 鍵あったよ。

次の対比も、自動詞・他動詞の両方の用法がある場合、日本語では(36)のように自動詞構文が、英語では(37)のように他動詞構文が用いられ、対応する構造にズレがある。

(36) a. 給料が上がった。

b. 宿題が終わった。

c. 予定が決まった。

- (37) a. I got a pay raise.
b. I finished my homework.
c. We have decided the schedule.

Leech and Svartvik (1975: 185)は、英語の他動詞構文を好む傾向は、「文末重点の原則 (principle of end-weight)」と関係しているとして、次のように述べている。

- (38) Connecting with the principle of end-weight in English is the feeling that the predicate of a clause should be longer or grammaticality more complex than the subject. This helps to explain why we tend to avoid predicates consisting of just a single intransitive verb. Instead of saying *Mary sang*, we would probably prefer to say *Mary sang a song*, filling the object position with a noun phrase which adds little information but helps to give more weight to the predicate.

このような英語の特徴は、意味的には自動詞でありながら、他動詞句と同じ VP の構造を持つ表現が英語には豊富にあるという事実によっても裏打ちされる⁷。

- (39) a. give a talk
b. make a remark
c. have/take a look at

さらに英語の自動詞のうち非能格動詞 (unergative verb) と呼ばれる自動詞は、日本語にはない(40)の「同族目的語 (cognate object)」や(41)の「見せかけの再

⁷ Dixon (1991: 344)によれば、have a VN, take a VN の形式を持つ表現の 2/3 が自動詞の意味であるとしている。このような形式を持つ表現の意味については、吉川 (1995) も参照されたい。

帰代名詞 (fake reflexive) 」と呼ばれる目的語を従えて、自動詞でありながら他動詞を主要部に持つ VP の構造に具現するものもある⁸。

(40) We recognize that no matter how responsibly we *live our lives*, any one of us at any time may face a job loss or a sudden illness or a home swept away in a terrible storm.

(41) We searched the woods and cliffs, *yelled ourselves* hoarse and imagined you drowned. (Levin and Rappaport 1995: 35)

(36)と(37)の対比に見られる日英語の構造のズレは、自動詞構文、他動詞構文のいずれが好まれるかという違いだけではなく、どのような主語を許容するかというもう 1 つの日英語の相違点とも連動している。英語では、(42)のように有生主語の他に無生物を主語に立てて他動詞構文を作ることができる⁹。

- (42) a. The sudden improvement in the weather enabled us to make very rapid progress towards the summit.
- b. Deeper consideration of the evidence suggests that *Homo floresiensis* was a genuinely distinct species.
- c. India's growing population is creating an urgent need for new water sources.
- d. Close observation of humans walking reveals the important role played by the ankle in maintaining balance.

⁸ (40)は 2012 年のオバマ大統領の指名受諾演説の一節である。(41)の「見せかけの帰代名詞」は、その後続く結果述語 (resultative predicate) と共起しなければ、使うことができない。詳しくは、Levin and Rappaport (1995)を参照されたい。

⁹ (42)とその日本語訳(43)は『東大英単』による。

一方、日本語では主語を立てる場合、有生名詞を選択することが好まれ、無生物を主語にすると不自然な文になることが多い。したがって、(42)のような無生物主語構文は、主語を副詞的表現に置き換え、かつ文全体を自動詞構文に具現することによって、自然な日本語文が得られる¹⁰。

- (43) a. 急に天候が好転したので、頂上に向かって速やかに進めるようになった。
- b. 証拠資料をさらに検討した結果、ホモ・フロレシエンシスは完全に別の種であったと考えられている。
- c. インドでの人口増大のため、新たな水源が緊急に必要なとなっている。
- d. 人間が歩く様子をよく観察してみると、バランスを保つ上で足首が果たしている重要な役割が明らかになる。

5. 大学生の英作文に見られる複文構造と自動詞・他動詞構文

上で述べた構造の対応関係に見られるズレは、広範に観察される現象であり、そのため日本人英語学習者の英語表現には、①単文あるいは重文の使用が多く、複文の使用が少ない、②自動詞構文の使用が多く、他動詞構文の使用が少ない、と指摘されることがある（栗原（2015b））。以下ではこうした傾向が大学生の英作文にどの程度実態として現れているのかに関する予備的調査の結果について述べることにする。筆者は、大学1年生の英作文に見られる単文、重文、複文の異なる文タイプ、自動詞構文、他動構文の使用率について予備的調査を行った¹¹。(44)は大学1年生の英作文における単文、重文、複文の使用数・率を示したものである。

¹⁰ (43a), (43c), (43d)では「なった」「なっている」「なる」で文が結ばれており、「ナル言語」の特徴が現れている。

¹¹ 調査は英語専攻の大学1年生（17名）を対象とした。必修英語科目の半期を受講し終えた段階で、授業時間内の30分程度を利用して自由なテーマで文章を書いてもらった。必要に応じて辞書など自由に用いることができたとした。

(44) 大学1年生の英作文中に見られる単文、重文、複文の使用数・率

	使用数	使用率
文の数	153	
単文	85	54.8%
重文	29	18.7%
複文	41	26.4%
文タイプの総数	155	100%

(44)の「文の数」とは、最上位の S (独立文) の数を表す。単文、重文、複文の合計数 (文タイプの総数) が文の数よりも多いのは、複文の中に複文が現れる場合があるからである。(45a)では、because 節の中に不定詞節が、(45b)では think のとる定形節内に不定詞節が埋め込まれている。しかしながら、このように複文の中に文の埋め込まれた複雑な複文の例は(45)の2例のみである。

(45) a. I am studying educational subject because I want to become an English teacher.

b. I think it is fun to teach something to someone.

各文タイプの使用率は、単文が全体の半数以上で、単文と重文だけで 73.5%を占めている。これに対して複文の使用率は 26.4%と低くなっている。当該の英作文中に現れる従属節の種類は、副詞節 (because 節、when 節、条件節) と to 不定詞節がそれぞれ 12 例 (合計 24 例) で全体の約半数を占め、その次に I like dancing. などの動名詞節が 5 例、これら以外には、動詞の補部として生じる that 節、関係節、仮定法節などが見られるがいずれもごくわずかである。

(46)は自動詞構文、他動詞構文の使用数・率を示したものである。

(46) 大学1年生の英作文に見られる自動詞構文・他動詞構文の使用数・率

Sの数	249
自動詞構文の数	172 (69%)
他動詞構文の数	77 (30.9%)

自動詞構文の使用数は他動詞構文のそれと比べると 2.2 倍となっている。これは限られたデータに基づくものであるが、第4節で述べた日英語の構造化に関する違いが、影響していると推察することができる。

命題の構造化に関する日英語の違いの実態を示す資料をもう1つ見ておきたい。以下では朝日新聞の「天声人語」とその英語訳における異なる文タイプ、自動詞・他動詞構文の使用率について述べる¹²。

(47)は「天声人語」とその英語訳における単文、重文、複文の使用数・率を示したものである。

(47) 「天声人語」とその英語訳に見られる異なる文タイプの使用数・率

	日本語「天声人語」	英語訳「天声人語」
文の数	57	51
① 単文の数	31 (49.2%)	9 (13.8%)
② 重文の数	15 (23.8%)	3 (4.61%)
③ 複文の数	17 (26.9%)	53 (81.5%)
①+②+③	63 (100%)	65 (100%)

¹² 朝日新聞朝刊に掲載された3つの「天声人語」（2018年4月22日、5月3日、5月12日）を調査した。英語訳は、『朝日新聞天声人語 2018夏』による。

日本語の天声人語では、単文と重文の占める割合が 73%となっているのに対して、英語訳ではわずか 18.4%となっている。一方、複文の占める割合は、日本語では 26.9%であるのに対して、英語では 81.5%となっており、日本語と英語では単文・重文と複文の使用に顕著な違いが見られ、第3節で述べた命題の構造化に関する相違が明確に現れている。

(48)は「天声人語」とその英語訳における自動詞構文・他動詞構文の使用数・率を示したものである。

(48) 「天声人語」とその英語訳に見られる自動詞構文・他動詞構文の使用数・率

	日本語「天声人語」	英語訳「天声人語」
Sの数	105	114
自動詞構文の数	62 (59%)	65 (57%)
他動詞構文の数	43 (40.9%)	49 (42.9%)

(48)を見る限り英語と日本語での自動詞構文・他動詞構文の使用頻度は、(46)で見た自動詞・他動詞構文の使用頻度ほど顕著な違いは見られない。しかしながら、「天声人語」の英語訳では、自動詞構文と他動詞構文の使用率の差が日本語のそれと比べると若干ながら縮まっており、(48)の結果は日英語の違いをある程度反映していると言えなくもない¹³。

¹³ 「天声人語」の英語訳において、他動詞構文に比べ自動詞構文の使用率が高いのは、元々自動詞構文の多い日本語文の翻訳であるという事情が関係している可能性がある。そうだとするならば、英語訳では自動詞構文の使用率が若干減少し、それに応じて他動詞構文の使用が増えているという事実は、英語では他動詞構文が好まれる傾向にあることを示唆していると解釈することもできよう。今後、日本語の翻訳ではなく、同じトピックについて書かれた例えば、新聞記事などを比較することによって、ここで問題としている日英語の違いをより鮮明に炙り出すことができるかもしれない。この可能性については、稿を改めて検討したい。

6. 終わりに

以上述べたように、日本語と英語は命題内容の構造化に関してかなり異なる特徴を備えている。こうした違いは言語活動に取り組むだけでは習得するのが難しい言語の属性である。伝達内容が緻密化、複雑化するほどに、英語ではそれを主従の構造的関係を持つ複文に構造化する、あるいは日本語の感覚では自動詞構文で表現するところを、英語では他動詞構文を用いて表現するといった力を養うには、学習者の持つ日本語の知識を意識化し、日本語と英語を明示的に対比させた学習が有効と考えられる。

参考文献

- Dixon, Robert M. W. (1991) *A New Approach to English Grammar, On Semantic Principles*, Clarendon Press, Oxford.
- 福地肇 (2012) 「英文法と英作文」 大津由紀雄 (編) 『学習英文法を見直したい』 218-230, 研究社, 東京.
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』 大修館書店, 東京.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 栞原和生 (2015a) 「英語教育における母語の知識の活用と文法指導」 長谷川信子 (編) 『日本の英語教育の今、そして、これから』 開拓社, 東京.
- 栞原和生 (2015b) 「メタ言語能力を育む英語教育の可能性を考える」 『英語教育公開シンポジウム「日本の英語教育—小学校から大学まで—第2部 グローバル時代に求められる英語使用者—高大連携から考える—」に於ける口頭発表, 神田外語大学.
- Leech Geoffrey and Jan Svartvik (1975) *A Communicative Grammar of English*, Longman, London.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press, Cambridge, MA.
- 益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』 くろしお出版, 東京.
- Pinker, Steven (1994) *The Language Instinct: How the Mind Creates Language*, Harperperennial, New York.
- ピンカー・スティーブン 『言語を生み出す本能 [上]』 (椋田直子訳) NHK 出版, 東京.
- Thomas, Margaret (2011) *Fifty Key Thinkers on Language and Linguistics*, Routledge, New York.

トーマス・マーガレット (2016) 『ことばの思想家 50 人—重要人物からみる言語学史』(中島平三総監訳) 朝倉書店, 東京.

吉川千鶴子 (1995) 『日英比較 動詞の文法—発想の違いから見た日本語と英語の構造』くろしお出版, 東京.

資料

朝日新聞 (2017年8月26日) 「経済气象台」

朝日新聞論説委員室 (編) 『天声人語 2018 夏』原書房, 東京.

文部科学省 『高等学校学習指導要領』平成21年3月告示.

文部科学省 『高等学校学習指導要領解説外国語編・英語編』平成22年5月.

東京大学教養学部英語部会 (編) (2009) 『東大英単』東京大学出版, 東京.